The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	花や紅葉はなぜ散るか ： 『万葉集』から『古今和歌集』にかけて
Author(s)	川井, 麻美
Citation	詞林. 2024, 76, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98179
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

花や紅葉はなぜ散るか
――『万葉集』から『古今和歌集』にかけて――

川井　麻美

一　はじめに

花や葉が散る表現は上代から韻文に現れ、その中には、何によってそれらが散ったかが読み取れる作品がある。花や葉が散ることについて触れた先行研究としては、以下のような論考がある。上代文学の雨について、川村幸次郎氏は、雨や露などの万葉集中の自然現象の素材を項目別に取り扱い、万葉集の雨の役割の一つが花を散らすことであることを指摘している。[1]また、壬生幸子氏は上代の韻文の雨が和歌の素材として扱われることとなった経緯について考察している。[2]また、落花落葉表現と感情の結びつきという観点から、三木雅博氏は、『古今集』前後に孤独の表象としての落葉表現が現れたことについて、白居易の「長恨歌」「晩秋閑居」詩内の表現が影響していると論じている。[3]滝川幸司氏は『古今集』桜歌の背景にある落花意識について、『万葉集』での桜のイメージと漢詩文における落花意識が、白居易の桜詩によって結びついたことと関係があると論じている。[4]このように、花や葉が散ることについては、ある和歌の素材の役割の一つ、あるいは落花落葉によって表現される、あるいはそこに含まれる人心という観点から論じられてきた。

しかし、何によって花や葉が散るのかという観点から、素材や歌集を跨いで論じた先行研究は見つからなかった。そのため、これらの先行研究を踏まえ、何が花や葉を散らすのかということに焦点を当て、『万葉集』『古今集』内の落花落葉表現が含まれる歌の分析を行う。『万葉集』では多様だった花や葉を散らす原因が、『古今集』にかけてバリエーションが減っていき、『古今集』以降も受け継がれる「風が花や葉を散らす」という表現が定型化した過程を明らかにすることが、本研究の目的である。

本論に入る前に、調査対象とする和歌の選定基準について説明する。今回は、落花・落葉の原因に焦点を当てて論じるため、花や葉が散ることが、現実の動作か否か、詠歌時点で

動作が完了しているか否かなどは考慮に入れず、「（何かによって）花や葉が散っている」ということが和歌中で明確に示されている和歌を分析対象とする。その判別は、「散る」「落つ」「うつろふ」など、落花・落葉を示す動詞が入っていることを基準とした。ただし、「散る」と似た現象の「枯る」「しをる」「なゆ」、また（人などが）「摘む」「手折る」などについては、『日本国語大辞典』の「はなればなれになって落ちたり、飛んだりする。特に、花や葉が草木から離れ去る」という意味[5]を重視し「散る」とは別の事象と考え今回は調査対象としない。その他、明らかに散っていることが読み取れる作品については個別に判別した。原因については、表現が多様で一律の基準を定めることが難しかったため、主に因果関係を示す単語の有無によって判定しつつ、直接の因果関係が和歌から読み取れるかどうかで判断した。

二　『万葉集』『古今集』間の変化の概要

まず、『万葉集』と『古今集』では、落花や落葉の原因がどのようであるかを調べた。それをまとめたものが以下の表[6]である。

原因（落葉）	万葉集	古今集
雨	10	1
風	3	7
露・霜	1	0
その他	1	1

表①－落葉の原因

原因（落花）	万葉集	古今集
雨	10	0
風	15	8
動物	15	1
雪	5	0
露・霜	5	0
その他	4	0

表②－落花の原因

調べたところ、落葉の原因は、『万葉集』では雨が、『古今集』では風が大半を占める。落花の原因は、『万葉集』では風、動物、次いで雨が目立ち、『古今集』ではそのほとんどが風である。他にも数が変化している項目はあるが、今回は、変化が顕著である雨と風に焦点を当てて論じる[7]。

二・一　『万葉集』の具体例

『万葉集』における落葉の原因は上記のように雨が多い。

（十月廿二日於二左大弁紀飯麿朝臣家一宴歌三首）
十月　之具礼能常可　吾世古河　屋戸乃黄葉　可落所見
右一首少納言大伴宿祢家持当時矚二梨黄葉一作二此歌一也
（巻十九・四二五九・大伴家持）

この四二五九番では、雨が紅葉を散らすことについて「つね」つまり慣習、ならいという表現を用いている。この歌は天平勝宝三年（七五一年）の作であり、この頃には雨（時雨）が紅葉を散らすという発想は定着していたと考えられる。

（詠二黄葉一）
君之家乃　黄葉早者　落　四具礼乃雨尓　所沾良之母
（巻十・二二一七・秋雑歌・作者未詳）

ここで用いられている推量の助動詞ラシは『角川古語大辞典』に「知覚ないし認識している事柄を根拠として示し、そういうわけだから当の事象が成立ずみのようだという意を表す用法。大多数の例はこの用法である」というように根拠の[8]ある推量を意味する。この点からも、雨によって葉が散ることは、『万葉集』では定着した考えであったことがうかがえる。

葉を散らす風の例では、落葉に風以外が関わる例がよく見られる。

（橘朝臣奈良麿結二集宴一歌十一首）
十月　鍾礼尓相有　黄葉乃　吹者将落　風之随
右一首大伴宿祢池主
（巻八・一五九〇・秋雑歌・大伴池主）

（詠二黄葉一）
風吹者　黄葉散乍　小雲　吾松原　清在莫国
（巻十・秋雑歌・二一九七・作者未詳）

悲二世間無常一歌一首〈并短歌〉
天地之　遠始欲　俗中波　常無毛能等　語続（中略）
山之木末毛　春去婆　花開尓保比　秋都気婆　露霜負而
風交　毛美知落家利　宇都勢美母　如是能未奈良之
紅能　伊呂母宇都呂比…
（巻十九・四一六〇・大伴家持）

『万葉集』で葉を散らす風の例は雨と比べて多くなく、この三例である。一五九〇番は「しぐれにあへるもみちばの」とあり、雨も散ることに関わっている。四一六〇番も、「つゆしもおひてかぜまじり」と、露も散ることに関わっている

ことがうかがえる。このことと、『万葉集』における落葉の原因となる雨、風の数の差を考えると、『万葉集』の中では風が葉を散らすことは、まだ表現として主流ではなかったと考えられる。

落花の原因としては、風のほうが多いが、雨と割合としては『古今集』ほど大きな差はない。

詠レ花
竿志鹿之　心相念　秋芽子之　鍾礼零丹　落僧惜毛
（巻十・秋雑歌・二〇九四・人麻呂歌集）

これは原因を表わす格助詞ニで原因が示されており、花を散らす雨の例である。調べた中では、落花の原因が和歌中に示されている例としては最も古い例である。

落花を起こす風の例として、以下のような和歌が挙げられる。

詠レ花
風散　花橘叫　袖受而　為君御跡　思鶴鴨
（巻十・夏雑歌・一九六六・作者未詳）

難波経宿明日還来之時歌一首〈并短歌〉
…岑上之　桜花者　滝之瀬従　落堕而流　君之将見
其日左右庭　山下之　風莫吹登　打越而　名二負有社尓
風祭為奈
（巻九・雑歌・一七五一・高橋虫麻呂歌集）

後述の『古今集』では、落花歌はほとんど桜についてであるが、一九六六番などに見られるように、季節を問わず花が散る歌が見られる。

二・二　『古今和歌集』の具体例

『古今集』では、先に述べたとおり、風が落葉、落花双方の原因として多数派になり、『万葉集』ではよく見られた雨が花や葉を散らす例がほとんど見られなくなる。

たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし
又は、あすかがはもみぢばながる
（巻五・秋歌下・二八四・よみ人しらず）

二八四番は『古今集』における、葉を散らす雨としては唯一の例である。読人しらず時代の作品で、推量の助動詞ラシにより、落葉の原因が雨であることがわかる。唯一の例の作詠時期が古いため、『古今集』のころには、葉を散らす雨は『万葉集』と比べると一般的ではなかった可能性がある。

花や葉を散らすものが風に固定化されるのは前に述べたと

おりだが、その他の特徴として、散る花がほとんど桜になったり、原因の示し方は『万葉集』と比べると多様になったりといったことがある。後者について、例えば以下のような例は顕著な例である。

さくらのごととくちる物はなしと人のいひければよめる
さくら花とくちりぬともおもほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ
（巻二・春歌下・八三・紀貫之）

八三番は花と人の心とを比較し、人の心について、風が吹く間もなく（散る）ということから、桜が風によって散るという考えを前提としていることがうかがえるが、非常に婉曲的な表現と言えるだろう。

以上のように、雨と風に注目すると、『万葉集』では、落葉の原因としては雨、落花の原因としては風と雨が並び、『古今集』では、大半が風になっている様子がわかる。このような傾向は勅撰集である『古今集』に収録された和歌以外の同年代の和歌にも同様に見られる。

三　漢詩文の落花・落葉の原因について

二章では『万葉集』から『古今集』にかけて、花や葉を散らすものに変化があったことを確認した。この変化について、漢詩文からの影響を検討するために、漢詩文中の落花落葉の原因も調べた。

まず日本の漢詩について述べる。今回は『懐風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』および『田氏家集』『菅家文草』『菅家後集』を調べた。花を散らす風や葉を散らす風に比べると、葉を散らす雨は数が少ないことがわかった。また、花を散らす雨の例は調べた限りでは見つからなかった。

落花の原因となる風の例としては以下のような詩がある。

椒花帯風散　椒花風を帯びて散らひ
柏葉含月新　柏葉月を含みて新し
（『懐風藻』七八「侍レ宴」守部大隅）

春風吹物暖　春風物を吹きて暖けく
朝夕蕩庭梅　朝夕庭梅を蕩がす
花點紅羅帳　花は點く紅羅の帳
香縈玉鏡臺　香は縈る玉鏡の臺
（『文華秀麗集』中・楽府・六八「奉レ和二梅花落一」菅原清公）

京城御苑桃李紅　京城の御苑桃李紅にして
灼灼芬芬顔色同　灼灼芬芬顔色同じきことを
一開雨　一散風　一たび雨に開き　一たび風に散る
飄上飄下落園中　上に飄り下に飄りて園中に落つ
（『経国集』巻十・六三「入レ山興一首」空海）

此花嫌早落　此花早く落つることを嫌ふ

争奈賂春風　争奈（いかんせ）む春風に賂ふことを
（『田氏家集』上・五四「惜二櫻花一」）

花散忽因風力處　花は散る忽ちに風の力に因る処
玉銷初見日光時　玉は銷ゆ初めて日の光を見る時
（『菅家文草』巻四・二七六「客居對レ雪」）

落葉の原因となる風の例は以下のような詩がある。

白露懸珠日　白露珠を懸くる日
黄葉散風朝　黄葉風に散らふ朝
（『懐風藻』「秋日於二長王宅一宴二新羅客一〈并序〉」五二・山田三方）

寒聲落葉簾前雨　寒声の落葉簾前の雨
點着閑筵不湿衣　閑筵に點着すれど衣を湿らさず
聞道琁璣秋月暮　聞道（きくなら）く琁璣（せんき）秋月の暮
聖年宮樹待黄飛　聖年の宮樹黄飛を待つと
（『文華秀麗集』下・雑詠・一三三「奉レ和レ観二落葉一」滋野貞主）

秋気悲兮落実　秋気悲しくして実を落とす
冬風急兮空枝　冬風急くして枝を空しくす
（『経国集』巻一・三「小山賦一首」石上宅嗣）

隨風吹遠近　風に隨ひて吹くこと遠くあるは近し
觸處落閑忙　処に触れて落つること閑にあるは忙し
（『菅家文集』巻二・一五五「黄葉」）

茅蒐霜染憐無限　茅蒐霜染めて憐れぶこと限りなし
刀刃風裁惜不能　刀刃風裁して惜むこと能はず
（『菅家後集』四七五「冬日感二庭前紅葉一示二秀才淳茂一」）

花を散らす雨の例は見られなかったが、落葉の原因である雨の例は三例見つかった。そのうち二例は風も共に原因として詠まれている。

晚節商天朔気侵　晚節商天朔気侵し
厳霜夜雨變秋林　厳霜夜雨秋林を變ふ
高飈一猟欲吹盡　高飈一猟吹き盡くさむと欲し
灑落寒聲萬葉吟　灑落寒聲萬葉吟ず
（『文華秀麗集』下・雑詠・一四〇「神泉苑九日落葉篇。應製」巨勢識人）

右の例は、「秋林を変ふ」に葉が散る意味が含まれる。また「高飈一猟吹き尽くさむと欲し　灑落寒声万葉吟ず」から、風も葉を散らすものとして考えられていることがわかる。

衝風急雨剣鋒摧　衝風急雨剣鋒摧き
禿樹飄叢毎日催　禿樹飄叢毎日催す
（『田氏家集』下・一九〇「賦得二草木黄落一（于時直冷然院秘閣）」）

この例は、「衝風急雨」と、風と雨が並んで落葉の原因として示されている。

聲寒絡緯風吹處　聲寒ゆる絡緯は風の吹く處
葉落梧桐雨打時　葉の落つる梧桐は雨の打つ時
（『菅家後集』四七三「九月後朝、同賦二秋思一、應レ制」）

右の例は、雨が葉を散らす原因として単独で現れる数少ない用例である。

このように日本の漢詩文では、落花も落葉も、原因は風のほうが多く見られ、『古今集』の傾向と類似していると言える。

中国の漢詩文は『文選』『白氏文集』を調べた。全体の傾向としては日本の和歌・漢詩文と同様に、雨よりも風が原因として示されている例のほうが多く見られる。特に葉を散らす雨の用例はほとんど見られなかった。

春風桃李花開日　春風桃李花開く日
秋雨梧桐葉落時　秋雨梧桐葉落つる時
（『白氏文集』巻十二・感傷四・五九六「長恨歌」）

これは雨が葉を散らす例である。この表現を摂取した日本の漢詩文には、先に挙げた『菅家後集』「九月後朝、同賦秋思、應制」の「葉の落つる梧桐は雨の打つ時」がある。

葉を散らす風には以下のような例がある。

飋瑟兮（除気促急風暴疾也）草木搖落（花葉凋落肥潤去也）飋瑟として草木搖落し
（『文選』巻十三・物色「秋興賦」潘安仁）
白露滋園菊　白露は園菊に滋く
秋風落庭槐　秋風は庭槐を落とす
（『文選』巻三十・雜詩下「擣衣」謝恵連）
西風飄一葉　西風一葉を飄し
前庭颯已涼　前庭颯として已て涼し
（『白氏文集』巻九・感傷一・四四二「新秋夕」）

花を散らす風には以下のような例がある。

凝霜霑蔓草　凝霜蔓草を霑し
悲風振林薄　悲風林薄を振るふ
摵摵芳葉零　摵摵として芳葉零ち
榮榮芬華落　榮榮として芬華落つ
（『文選』巻三十・雜詩下・「時興」盧子諒）
日暮涼風來　日暮れて涼風來り
紛紛花落叢　紛紛として花叢に落つ
（『白氏文集』巻八・閑適四・三四八「秋蝶」）
厭風風不定　風厭へども風定まらず

風起花蕭索　風起りて花蕭索たり
（『白氏文集』巻五十一・二二四〇「落花」）

花を散らす雨の例は、前述のとおり日本の漢詩には見られなかったが、『白氏文集』中には複数の例が見られる。

夜雨槐花落　夜雨槐花落ち
微涼臥北軒　微涼北軒に臥す
（『白氏文集』巻五・閑適一・一九九「禁中暁臥、因懐二王起居一」）

蕙風晩香盡　蕙風晩香盡き
槐雨餘花落　槐雨餘花落つ
（『白氏文集』巻九・感傷一・四〇七「寄二元九一」）

夜来風雨急　夜来風雨急に
無復旧花林　復た旧花林無し
（『白氏文集』巻五十六・二六八七「惜二落花一」）

暁来紅萼凋零盡　暁来紅萼凋零し盡き
但見空枝四五株　但だ見る空枝四五株
前日狂風昨夜雨　前日の狂風昨夜の雨
残芳更合得存無　残芳更〻合して存するを得るや無や
（『白氏文集』巻十九・律詩・一二七二「惜二小園花一」）

このうち一六八七「惜落花」や一二七二「惜小園花」は、雨と共に風が落花の原因として示されている例であり、風による例ともとれる。

中国の漢詩文は、『白氏文集』に花を散らす雨が複数見られる点が日本の和歌・漢詩文とは少し異なる。しかし、雨よりも風のほうが落花落葉の原因として多数派であるという点は共通している。

以上確認したように、今回調べた範囲内の日本の漢詩文には、落花を起こす雨は見られず、落葉を起こす雨も風に比べると少ない。中国の漢詩文は、落花の原因に雨が日本よりも多く見られるものの、落花落葉ともに風の例のほうが多く見られ、『万葉集』と比べると『古今集』の傾向に近い。このことから、中国の漢詩文が二章で述べたような変化に影響を与えた可能性が考えられる。しかし、漢詩文の影響のみで変化が起きたと言えるほどに完全に一致しているわけではない。そのため、次章ではその他の要因について考察した点を述べる。

四　落葉の原因と漢語「紅涙」との関係についての考察

落葉については、三章で検討した漢詩文の影響以外にも理由があると考えられるため、本章ではその点に限定して考察を加える。

落葉の原因が雨から風へと変化したことについては、前述

の漢詩文の傾向の他に、「紅涙」という漢語が関わっていると考えられる。『万葉集』には、「葉を散らす雨」「葉を散らす風」のほかに、「葉を色づかせる雨」と「葉を色づかせる風」が見られる。

○葉を色づかせる雨

衛門大尉大伴宿祢稲公歌一首

鍾礼能雨　無間零者　三笠山　木末歴　色附尓家里

（巻八・一五五三・秋雑歌・大伴稲公）

大伴坂上郎女竹田庄作歌二首

隠口乃　始瀬山者　色附奴　鍾礼乃雨者　零尓家良思母

右天平十一年己卯秋九月作

（巻八・一五九三・秋雑歌・大伴坂上郎女）

○葉を色づかせる風

（詠二黄葉一）

露霜乃　寒夕之　秋風丹　黄葉尓来毛　妻梨之木者

（巻十・二一一八九・秋雑歌・作者未詳）

秋風之　日異吹者　水茎能　岡之木葉毛　色付尓家里

（同前、二一一九三）

しかし、『古今集』のころには、「葉を散らす雨」「葉を色づかせる風」はほぼ見られなくなり、「葉を色づかせる雨」「葉を散らす風」のみが引き続き表現として残るのである。この点に「紅涙」に由来する表現が和歌に取り入れられたことが関わるのではないか。

先に「紅涙」という表現について説明したい。これについては于永梅氏が[10]詳しく論じているため、次に引用する。

中国では、「血涙」は主に死別の悲しみや切迫した憂国の情の表現として、多く男性を対象として使われる。（中略）一方「紅涙」は、化粧した女性の美しさを強調し、女性特有の表現として用いられていた。（中略）

漢語「血涙」「紅涙」は、本来それぞれ違う意味を持っていた。平安時代の漢詩文に受容される際も、先行研究が指摘しているように明確な区別がなかったのではなく、もとの漢語の用法の一部を忠実に受け入れた例も認められる。しかしながら、同じ紅色を示す表現であったために容易に混同され、また日本では色対という作詩、作文方法が重視されたため、中国にない使い方が多く見られるようになったと考えられる。そして、両語はだんだんと区別されなくなっていったのではないかと考える。

于氏の論によれば、平安時代の日本の漢詩では、中国では用法が異なる「紅涙」「血涙」の語が混同され、受容後は徐々に「紅涙」が「血涙」の意味をも含むようになった。「紅涙」

は男女問わず死別の悲しみの表現や閨怨詩に用いられた。

和歌に「紅涙」を訓読した語である「くれなゐのなみだ」という表現が見られ始めるのは平安時代に入ってからのことである。

涙流双袖血成文

なく涙こふる袂にうつしてはくれなゐふかき色とこそ見れ

（『千里集』離別部・九三）

これは「紅涙」の表現を取り入れた和歌としては早い例である。『千里集』は、平安時代前期の歌人大江千里が、中国の詩句を題にして和歌を詠み、寛平九年（八九七年）に宇多天皇に献上した私家集である。九三番の題は中唐の詩人元稹の『元氏長慶集』巻十八の「送致用」が出典である。[11]

紅涙から発想を得た和歌は、『古今集』にも見られる。

さきのおほきおほいまうちぎみをしらかはのあたりにおくりける夜よめる

ちの涙おちてぞたぎつ白河は君が世までの名にこそ有りけれ

（『古今集』巻十六・哀傷・八三〇・素性法師）

題しらず

白玉と見えし涙も年ふればから紅にうつろひにけり

（『古今集』巻十二・恋二・五九九・紀貫之）

これらは紅涙の色彩に着目し、白という色と対比した表現の例である。

これに加えて、前述した雨などが草木を赤くするという『万葉集』以来の発想と、平安時代に入って日本に伝わった漢語「紅涙」の色彩的な部分が結びついた表現は、撰者時代の和歌に用例が見られる。

をんないと心うきものから、あはれにおぼえければなみださへしぐれにそへてふるさとはもみぢのいろもこさぞまされる

（『伊勢集』二）

七条の后うせたまひて

…かなしきに　なみだのいろの　くれなゐに　われらがなかの　しぐれにて　秋のもみぢと　人人は　おのがちりぢり　わかれなば　たのむかげなく　なりはてて　とまる物とは　花すすき　君なきにはに　むれたちて　そらをまねかば　はつかりの　なきわたらんを　よそにこそみめ

（同前、四六二）

これらは、「紅涙」と「紅葉させる雨」の発想を取り入れ

た表現を用いている。加えて、「あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつつ」（『古今集』六三九、藤原敏行）のような、『古今集』ごろから見られる涙を雨に見立てる発想も関わっていると考えられる。そのため、紅葉させるのは涙に似ている水分である必要があり、葉が色づくことと雨の結びつきは、『万葉集』の季節的な重なりによる表現よりも強固であると言える。『古今集』に「秋の夜の露をば露と置きながら雁の涙や野辺を染むらむ」（二五八、壬生忠岑）という和歌があるが、これも露が紅葉させるという発想と、紅涙の色が取り入れられた表現という解釈がなされている。[12] こうした和歌の表現のために「葉を色づかせる雨」のほうが表現上主流となり、また『古今集』の技巧的な歌風や題材の固定化の流れを背景として、「葉を散らす雨」および「葉を色づかせる風」が廃れたのではないだろうかと考えられる。

五　まとめ

『万葉集』では落花・落葉の原因としては雨が割合として多かった。しかし、『古今集』ではそれらの原因の大半が風になっている。この『古今集』の特徴は、『白氏文集』や『文選』など中国の漢詩文の表現と類似している。このことから、この変化は、中国の漢詩文の影響を受けた結果である可能性も考えられる。ただし、完全に一致してはおらず、強い影響があったとは断言し難い。

落葉については、「紅涙」という語やこれに由来する表現が、縁語や見立てなどといった表現技法を持つ和歌に取り入れられたために、「葉を散らす雨」よりも「葉を色づかせる雨」という認識が強まったのではないかと考えられる。それに加え、『古今集』頃から見られる和歌の素材の詠まれ方の固定化や技巧的な歌風のために、「葉を散らす雨」は表現としては廃れ、葉を散らすものとしては風が主流になったのではないかと考えられる。

今回は落花・落葉の原因の中でも、雨と風について考察した。しかし、動物や雪、露霜なども『万葉集』にはあり『古今集』には見られない落花・落葉の原因である。その上で風が主流になった経緯については今後の課題としたい。

《テキスト出典》

・和歌：『新編国歌大観』（『万葉集』は旧番号、新訓）
・『凌雲集』：小島憲之『国風暗黒時代の文学　中（中）』（塙書房）
・『経国集』：小島憲之『国風暗黒時代の文学　中（下）Ⅰ』（塙書房）
・『懐風藻』『文華秀麗集』：日本古典文学大系（岩波書店）
・『菅家文草』『菅家後集』：日本古典文学大系（岩波書店）
・『田氏家集』：小島憲之『田氏家集注』研究叢書（和泉書院）
・『白氏文集』：新釈漢文大系（明治書院）

・『文選』：『文選　附考異』（藝文印書館）

《参考文献》

・川村幸次郎『万葉人の美意識――天然現象を通して――』（笠間書院、一九七八年）

・壬生幸子「上代の雨」（『共栄学園短期大学研究紀要』一六号、二〇〇〇年三月）

・三木雅博『平安詩歌の展開と中国文学』（和泉書院、一九九九年）

・滝川幸司「桜が散ること―古今集桜歌の漢詩文基盤―」（大阪大学古代中世文学研究会『詞林』十二号、一九九二年十月）

・小町谷照彦『國文學　解釈と教材の研究』第44巻14号「名篇の新しい評釈　雁の涙や野辺を染むらむ　古今和歌集評釈」（學燈社、一九九九年一二月）

・金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究篇』（培風館、一九四三年）

・片桐洋一『歌枕歌ことば辞典（増訂版）』（笠間書院、一九九九年）

・佐竹昭宏　校注『新日本古典文学大系　萬葉集』（岩波書店、一九九九年）

・内田泉之助・網祐次・中島千秋著『文選　賦篇』（明治書院、一九六三年）

・于永梅「平安時代の漢詩文における『血涙』『紅涙』の需要」（和漢比較文学会『和漢比較文学』第三十一号、二〇〇三年八月）

・日本文学 web 図書館『新編国歌大観』

・『日本国語大辞典』Japan Knowledge 版

・『角川古語大辞典』Japan Knowledge 版

・『国史大辞典』Japan Knowledge 版

【注】

（1）川村幸次郎『万葉人の美意識――天然現象を通して――』「万葉集の雨」（笠間書院、一九七八年）

（2）壬生幸子「上代の雨」（『共栄学園短期大学研究紀要』一六号、二〇〇〇年三月）

（3）三木雅博『平安詩歌の展開と中国文学』第二部Ⅷ「紅葉降る宿――古今集時代における「長恨歌」享受の一端――」（和泉書院、一九九九年）

（4）滝川幸司「桜が散ること―古今集桜歌の漢詩文基盤―」（大阪大学古代中世文学研究会『詞林』十二号、一九九二年十月）

（5）Japan Knowledge 版『日本国語大辞典』「散る」（参照 2023/07/20）

（6）※万葉集、古今集双方で例がない項目は表記しない　※表の数字は個数　※重複があるため、項目別の個数の合計は、和歌の数と必ずしも一致しない

（7）全用例は紙幅の都合上割愛し、以下に雨、風の用例の作品番

号と分類を示す。

『万葉集』落葉−雨：1053、1554、1583、1585、1594、2215、2237、2217、4111、4259／落葉−風：1590、2198、4160／落花−雨：1557、1747、1864、1870、1918、1970、2094、2097、2116、2262／落花−風：1437、1445、1458、1542、1660、1747、1748、1751、1856、1966、2096、2108、2121、4452、4453／『古今集』落葉−雨：284／落葉−風：285、286、290、303、304、783、859／落花−風：76、83、85、86、87、89、106、124、363、446、464

（8）Japanknowledge 版『角川古語大辞典』「らし」（参照 2024/09/05）

（9）丸括弧内は李善注

（10）于永梅「平安時代の漢詩文における『血涙』『紅涙』の需要」（和漢比較文学会『和漢比較文学』第三十一号、二〇〇三年八月）

（11）金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究篇』第二「句題和歌（大江千里集）の研究」第三章第二節（培風館、一九四三年）

（12）小町谷照彦『國文學　解釈と教材の研究』第44巻14号「名篇の新しい評釈雁の涙や野辺を染むらむ　古今和歌集評釈」（學燈社、一九九九年一二月）

（かわい・あさみ　本学博士前期課程）